# 自殺

がたがたと鳴る車輪は乾ききらない洗濯物の匂いがした。それは自らの体液のにおいであった。気づくのに一秒半かかった。廻らぬ車輪が線路に擦れる音がいつまでも耳の中に響き、今は遠い指先がその音をかきむしる。痛みすらも遠い。

だんだんと一瞬のうちに、いちいちが赤くなってゆく。真っ赤にまみれた視界はいつの間にかその明度を増し、すべての輪郭がするすると融解していく。線路も線路も掌も、一つになる。

そしてすっかり赤と白に満ちた世界で、私は空を泳ぐ魚の群れを見たのだ。それはころころと虹のように色を変えながら、キリキリと夕時の森のような泣き声をあげる。左手を伸ばすと、集まってくる。その口から小さな玉が幾つも零れる。ライチのように甘い香りの玉だ。

魚たちは私の左手に齧りついた。赤に溶け出していた皮膚が魚たちの細やかな歯によって輪郭を取り戻し、引き剥がされてゆく。針が差すような痛覚を右耳の後ろに微かに感じると、剥き身と鳴り身体の拘束から解き放たれた肉の繊維がそよそよと空に踊っている。

肉の繊維が魚たちに引っ張られると、腕に幾つもの裂け目がつつつと走った。それは、恋人の体に這わす指のように。そして裂け目から小さな甘い玉が入り込んでくる。玉は私の体の中で、ぷつぷつと小さな震動を吐き出しながら破裂して、細やかな無数の震動と甘さを体中に染み渡らせた。

解かれた腕肉の向こうから骨がのぞいた。骨は黒い色をしていた。私は最初、それを傘の柄だと思ったのだ。まるで影のように沈む私の骨は肉から抜け出れたのが嬉しかったのか、ふねふねとその身をくねらした。気づくとその骨はわたしの全てだった。後は、全部、ない。内臓も何もかも、知らぬ間に魚に食い尽くされてしまったのだろうか。

しばらくの間魚たちと共にふねふねとその身を踊らせていた骨は、やがて彼らを喰らいはじめた。骨が喰い込むと、魚の骨にひびが入る。味は、光化学スモッグに似ている気がする。悪くない。

魚たちが喰い尽くされるとキリキリという鳴き声が途絶え、後には静寂が鳴り渡った。そしてその響きはそのままそのまま私に伝わり、私はやがて、その静寂になった。

それは最早、赤くも明るくもない世界だ。青くも暗くもない痛くも甘くもない。在るのは只の、静かな震動だけだ。私は其処で小さい玉の甘さに似た震えを纏いながら、方々に身を散らした。世界中に染み渡るのは、死に際に見る小さな夢だ。

「それはきっと大事なことだわ。多分ね」と、彼女は言った。
僕はといえば“人間”という単語を誤って“ジンカン”と読んでしまった事をただの笑い話として面白おかしく話しただけのつもりだったので、彼女の意外な返答に少し面食らってしまった。ただ、しばらく考えてみたところで“人間”を“ジンカン”と読んだことがどう大事なのか僕にはさっぱりわからないし、おまけに彼女の「きっと」という軽く断定に近い推量を使いながらも「多分」などという些か不安を感じさせる推量を重ねて使うといった少し自信なさげな言葉遣いに愛おしさを感じてしまったせいで面倒な思考を続ける余裕がなくなっていた。そんな訳でしばらく考えるふりを続けてみたがまったく廻らぬ思考に巨大な退屈がゆっくりと染み込んできたので、思考を切り上げて素直に質問してみることにした。
「なぁ、僕にはわからないんだ。いったい何がどう大事なのかな？」
「大事なことよ。明らかじゃない」と、言って、寝転がった彼女は照明の紐からぶら下がっているアンパンマンの人形を右足でしなやかに突っついた。アンパンマンは背中から生えた紐を軸にくるくると廻りながら乱雑な円を描いてゆく。僕がゲームセンターで取ってきた人形だ。珍しく、二百円ぽっちで取れた。
彼女はアンパンマンが一周する度に左右の足で突っつき廻した。僕は彼女が持ち上げる度にジーンズから浮かび上がる下着の形に気を取られながらも、腰から下を九十度天井のほうに持ち上げた彼女の姿を見て、あるウルトラマンの怪獣を思い浮かべた。頭が下についているやつだ。なんてったっけ。どれに出てたんだっけ。セブンだっけ。新マンだっけ。
「つまり、その時あなたは少しだけ解き放たれたのよ」と、彼女は言った。
「その、つまり、一般的な日本語の言語体型からね」
僕はその時、初代ウルトラマンに出てきた怪獣を順々に辿って頭が下についている怪獣を探っているところだったので、彼女の話を聞きながら“ブルトン”という手も足も生えていない怪獣のことを思い出した。ぱっと見、角ばったポップコーンにしか見えない“怪獣”という概念から解き放たれすぎたその造形は、子供心にとびっきりの衝撃を受けたものだ。つまり、僕の読み違えは“ブルトン”だということだろうか。それなら彼女が「大事だ」と言う意味もわからなくもない。あのアバンギャルドな造形は他に類を見ない重要なものだ。
「なんとなくわかったかもしれない」と、僕は言った。言いながら、後のウルトラシリーズで“プリズ魔”という“ブルトン”によく似た怪獣が存在していたのを思い出した。確か、新マンだったと思う。彼女は左足のかかとでアンパンマンを方向転換させながら、僕の目をじっと見つめた。
「わかってないわね」と、彼女は言った。「どうせアンパンマンのことでも考えていたんでしょ。私が言っているのは現実性から解き放たれたファンタジーのことじゃないわ」
実際には彼女の推量は間違っていたのだが、それでも僕がファンタジーじみた特撮番組のことについて考えていたことは確かなので、僕はそのことには触れずに大人しく彼女の言い分を聞き入れることにした。僕は、わかっていないのだ。
「それなら一体どういうことなのかな？」

「ここは現実よ。紛れもなくね」
「それは知ってるよ。僕も君も、夢じゃない」
「ただ、現実が現実たる為にはある枠組みが必要だわ」
「法律とか、そういうの？」
「それも、一つ。常識とか伝統とかもね」
「日々の習慣もそうかな？」
「そうね。つまり、私たちが現実に生きる、ということはそういった枠組みの中でしかありえないの。私たちの生はそうやってそつなく纏められているのよ。私はそんなものにロマンは感じないわ。だってそんなもの、ただの出来のいい工業製品と変わらないじゃない」と、彼女は相変わらず言葉に熱を込めずに言った。言ってから、下半身を床に下ろした。無理な体勢で少し疲れたのか顔を微かに歪め、ぬるいため息のようなものを吐く。僕は思わずその吐息に欲情してしまう。彼女の汗のにおいを口の中に思い出す。
「で、それが“人間”を“ジンカン”と読んだことにどう関係してくるのかな？」と、いまひとつ理解しきれない彼女の話に些か退屈を覚え始めた僕は、どのタイミングで彼女に覆い被さろうかと考えながら、早いところ結論を導きだしてしまおうと思った。言いながら、引き続いて顔が下についている怪獣の名前を記憶から探り続けていた。雰囲気的には新マンのような気がするのだが。
「だからあなたは“人間”を“ジンカン”と読んだ瞬間、そういった枠組みの中から解き放たれていたのよ。たとえそれがほんの一瞬であっても、それは現代社会に対する重要なオルタナティブだわ」と、彼女はそういって仰向けに寝転がったまま僕の目をじっと見つめた。見つめながら、喋りすぎて乾いたのか、上下の唇を舌でぺろっと舐めた。唇が艶やかに濡れ、僕の脳髄を射抜く光を放つ。
僕は“オルタナティブ”という言葉の使い方がなんとなく間違っていると思いつつもそんなことには構わずに座ったままの彼女に擦り寄り、一点の淀みもない動きで、彼女にキスをした。口を開け下唇を甘噛みすると、彼女も同じ動きをする。彼女がさっきまでつまんでいたチョコレートの味がやんわりと伝わってくる。その全てが愛おしいと思う。
ツインテールだ、と、そのチョコレートの商品名を思い浮かべていた僕は唐突に怪獣の名前を思い出した。ツインテール！そうだ！ツインテール！ツインテール！ツインテール！もう何度でも口に出したい。ツインテール！そういえばツインテールは他の怪獣に食べられてしまうんだっけ。確か。
ここで僕は、ツインテールが他の怪獣に食べられた事と僕が彼女に齧りついている事との関連性について他愛もない冗談を思いついたのだが、彼女が思いのほかその気になっているようだったので何も言わずにそのまま唇を首筋に這わした。手を握ると、じっとりと握り返してくる。彼女が日常の状態から性的快楽を享受する状態へと移行するこの瞬間がたまらなく好きだ、と、彼女からの働きかけを失ったアンパンマンがふわふわと力なく、それでも確かに旋回している下で、僕は思った。

# 無能

完全な流れ作業の中で私は、コーラが口の中ではじける感触を思い出していた。乾いた口の中であの無闇な甘さが広がり広がる。広がり広がって、強張る腿の筋肉をなんとなく緩める。コンテナの中で腰を折り曲げながら取り出した荷物が思ったより重く、二の腕の筋肉が不要に伸びた。全ての荷箱には大きく魚の絵が描かれていた。中身も魚なのだろう。

冷たい。

下ろした荷物は緑色のコンベアに乗って倉庫内を上下左右無表情に徘徊し、再び私の前に姿を現す。そしてそれをまたコンテナに詰める。詰め終るとコンテはどこかへ運ばれてゆく。始まりも終わりもなく、ただ課程だけが続く。

それにどんな意味があるのか私にはわからない。知らない。緑色のラインはただ数学的な意味だけを記し、何も語りはしない。

ただ均等に繰り返される肉体活動は私の脳味噌から余計な不純物を削ぎ落とし、無闇に思考を純化させている。純化された思考は私の掌に掬い取られることなく無表情に脳神経を廻る。感情はいつの間にか蒸発してしまったみたいだ。コンテナ移動のために床に埋め込まれた銀色のボールがぎゅるぎゅると廻る音が、響く。

ふっ、と軍手の拘束を離れ、荷箱が落ちた。コンベアの稼動音に隠れて衝突音がする。それは均質な倉庫にいった、少しいびつなひびだった。荷箱が幾許かひしゃげ、魚の絵が痛々しく歪む。

慌てずに荷箱を拾い上げると、倉庫上層の踊り場から垂れ下がっている赤い玉がくいっと動き、私のほうを見た。見て、ぅいいん、と中で何かが作動する音を立てる。立てて、がーがーと黄色い光を静かに放つ。クビではない。まだ余裕はある。

私は荷箱をコンベアに乗せ、頬に掻いた汗を拭った。ついでになんとなく、手首に唇を這わす。そのひんやりとした強い塩味は私の唇をぴりぴりと乾かして脳髄の奥から昨晩食べたスズキの塩焼きを引きずり出した。空いた内蔵からだくだくと胃酸が染み出て、胃の内壁が粗く焼けた。

# 死骸

「あたしが死んだら笑ってね」と彼女が言ったので、通夜で声を張り上げて笑ったら彼女の弟にぶん殴られた。泣きはらす弟の鼻汁は黄色かった。ちゃんとご飯を食べているのだろうか。
しかし特別仲が良かったわけでもないのだが彼女の机の上にはあたしに宛てた手紙があって、それはとても彼女らしい愛らしい便箋にしたためられていて、あたしは剥きかけのみかんのような空の下で丁寧に折りたたまれたそれを開け広げながら、ぼんやりと彼女がこの便箋を購入している光景に思いを馳せる。彼女の粒の粗い、怯えたような声を頬の端に思い出す。散歩に来ていたいぬが公園の真ん中でわんわんと鳴いている。風が吹いてあたしの頬をするする撫でると、腰掛けるベンチの傍らで木の葉が身を捩じらせた。
木の葉のような、人だった。いつもきょろきょろとクビを振り回しながらふらふらと歩いていた。地下鉄のホーム際も、あんなふうに歩いていたのだろう。風が吹いたのだ。
ふわっと。
風が。
そしてまだ開けきっていない手紙は宙を舞って右手にある茂みに飛んだ。眼の端がぎっしりと詰め込まれた手紙の文面を捉えた。相変わらずねじくれた文字だった。便箋の柄にそぐわないその重さが体に苛立たしく染み込んでくる。
あたしは口の中に血の味を持て余しながら手紙を追いかけた。吠えていた犬は飼い主の手を振りほどいて、鉄棒の周りをぐるぐる廻っている。
思ったより深いその茂みは赤い陽を受けて水のような青を放った。分け入ると、葉と葉が擦れ合って闖入者の来場を辺りに知らせる。あたしは一瞬、この茂みの中に眠っている何かが目覚めてしまうのではないかと、根拠のない恐怖を抱いた。
手紙は、あたしに背を向けながら朝の雨が微かに残る土の上に伏していた。土の水分が手紙に浸透し、背に描かれていたピンクの魚の顔を悲壮に歪ませている。何がそんなに悲しいのだ、とあたしは思う。
なぁ、魚。
さかな。
さかな。
ふ、っと手紙の上に虫が落ちてきた。三匹。小さな丸い甲虫だ。その黒い背は虫に似つかわぬ艶やかな光を発している。三匹は魚の上で微動だにしない。
手紙の隅っこを右手でつまみ上げ、大きく振り回した。虫は吹き飛んだ。だが、手紙も千切れ飛んでしまった。雨のせいだ。朝降った雨のせいだ。ひき千切れた。
過ぎてしまった時間の向こうに手を伸ばしてみたが、途方もない無力感と後悔しか掴めなかった。二つに割れた手紙は、今度は背を向けずにあたしのほうを見ている。汚れて、千切れて、滲んで、ぎっしりと詰まった文字は融解し、判読が難しくなっていた。気づくと陽は沈み始めている。吠える犬も、もういない。
あたしは袖をまくると、湿った土に手を触れた。ふんわりと、冷たい。そしてつめを惜しみなが

らその土を抉り出す。抉り出す。
そこに出来る窪みは、大昔から手紙の居場所であるようだった。二つの手紙をそこに添えると、辺りのざわめきも消えてゆく。
あたしはしゃがんだまま両手を地につけ、くぼみに横たわる魚に弔いの口づけをした。その冷たくてきめの粗い感触は目覚める前の空のように、安らかにあたしを包んだ。

# 昼寝

それはよく晴れたいつもの日曜日で、私はちょうど、大きく開いたカーテンの間から入り込む黄色い日光の中でお気に入りのポップスに浸りながら、うつらうつらとまどろんでいるところだった。
ドラゴンがやってきた。世界中の雑音を寄せ集めたようなそのぎりぎりとした咆哮によって、甘味を抑えたコーヒのような心地よいまどろみを破られた私は、苛立ちを片手に窓際に駆け寄った。ドラゴンは京浜急行のような真っ赤に長いその巨体をゆらゆらとふらつかせ、街に大きな大きな影を落としている。穏やかな陽が遮られ、ひらひらと寒気が立ち昇ってきた。
「ねぇねぇドラゴンさん。ちょっと退いてくれない？」と私はベランダに出て、精一杯の大きな声で呼びかけた。「うるさくて、寝れやしないわ。それに陽が当たらなくなって、寒いのよ」
「やぁやぁそれは悪かったね、お嬢さん」と、ドラゴンは私の住むと国道を挟んだ向かいに建つマンションにするすると巻きつきながら、いびきのような声で言った。と、いうか言ったような気がした。滑舌が非常に悪いせいで、実際に聞き取れたのは「ぎゃあぎゃあ、ぎぎょげぎょがえい。ぎゃんぎゃん」でしかなかったし、そもそもドラゴンが人間の言葉を解するなんて、聞いたことがない。
ドラゴンが締めつけると事も無げにマンションは崩れ落ちる。聞くに堪えない悲鳴と、ちょっとした雷のような崩壊音が私の神経を逆撫でした。
「だからうるさいって……」と、私は呟いた。その声が届いたのかどうかはわからないが、瓦礫をほじくって住人たちをぱくついていたドラゴンはその牛のような瞼を持ち上げて私を一瞥すると咆哮と共に上昇し、太陽に齧りつきだした。
太陽は発情期のよう猫のような悲鳴を上げて軋みながら、いったひびから腐った蜜柑色の血液を流した。そのどろりとガスくさい雨は私のマンションを除く街中をあらかた焼き尽くす。赤い炎が立ち上がって熱気と二酸化炭素を吐き散らす。頭が少し、くらくらし始める。
「ねぇねぇ、ドラゴンさん。私がして欲しいのはこんなことじゃないわ」と、私は太陽をもぐもぐと噛み砕きだしたドラゴンに呼びかけた。太陽を失い夜になった世界の中でやたら存在感を放つ炎はまるで女体に踊る陰毛のようにその身を捩じらせる。
「これがさ」と、ドラゴンは言った。
「コーラの味がするのさ」
「だからそんな事をきいてるんじゃあないのよ。おひさまがなかったら穏やかなお昼寝が台無しじゃない」
「だから暖かくしてやったじゃないか」
「これはむしろ、暑いわ。著しくね」
「わがままなお嬢さんだな」
「穏やかなお昼寝こそが私の人生だもの。譲れないわ」
「勇敢なお嬢さんでもあるね」
「どうしてくれるのよ」

「どうもしないさ」
「無責任なドラゴンね」
「ドラゴンとはそういうものだからね」と言ってドラゴンは硫黄くさいため息をついた。声の不快さと合わせて私は物凄く気分が悪くなり、昼食をそのまま吐き出してしまった。消化されていないパスタがのどの粘膜を刺激して、びりびりと痛む。
「おやおや、大丈夫かい？」
「とりあえず炎を何とかして欲しいわ」と、私は指でパスタを引き抜いた。
「息苦しくてしょうがない」
「わがままなお嬢さんだな」
「お嬢さんとはそういうものだわ」
「ふぅぅむ」と、ドラゴンは再び深く息を吐き出した。その息はそのまま空に昇り、巨大な白い雲になる。黒い夜に溶けきらないその雲は、そのうちに自らを燃える炎の中に絞り落とした。幾つもの白い巨大な水滴が大地を撃ちつける撃ちつける。蒸発音が耳を突き、地が揺れ、そしてそれはそのまま私の部屋を大きく揺さぶった。街の中心部のほうには大きなクレーターが出来ている。なんとなく、あそこでスケートをしたら楽しいんじゃないか、と思う。
「これで、どうだね？」と、ドラゴンは言った。
「うん。ちょっと揺れたけど、炎に関してはとりあえずいいわ」
「そりゃあよかった」
「あとは太陽ね。お昼寝に、穏やかな日差しは不可欠だわ」
「太陽をどうしろと言うんだい？」
「どうにかして欲しいのは太陽じゃなくて、お昼寝よ」
「喰っちまったんだ。あれはコーラの味がして旨い」
「あなたに私の喜びを奪う権利なんか無いはずだわ」
「権利なんか知らないね。ドラゴンは喰いたいものを喰うだけさ」
「身勝手なドラゴンね」
「ドラゴンとはそういうもんだ」と、ドラゴンはくるくると螺旋を描きながら空高く飛翔した。
「ただ、あんたのことはほんの少し、ほんの少しだけ、少し、気に入ったんだ」
そう言うとドラゴンはあごの関節が外れんばかりに口を広げ、地下鉄が百本同時に通るような轟音と共にのどを膨らまし、口から太陽を吐き出した。吐き出された太陽は一旦噛み砕かれたせいか、ひどくいびつで小さな形をしている。まるで幼稚園児のこしらえた粘土細工のようだ。ドラゴンがぐるるとのどを鳴らすと太陽は弱々しくも、それでも確かに世界を照らし出した。
「どうだい？」と、ドラゴンは言った。
「悪いわね、吐き出させちゃって」
「ハハ」と、ドラゴンは笑った。
「らしくないね」
「まぁ、とにかく有難う。これでまたお昼寝ができるわ」
「そうかい。そりゃあよかった」

「ええ、よかったわ。」
「じゃあ、帰ろうかね。」と、ドラゴンは言った。
「お嬢さんがいると、やりにくくて仕方がない」
「そうね。あなたがいるとやはり、お昼寝の邪魔だわ」
「ふぅぅむ」と、ドラゴンは息を吐き出した。
「やさしいお嬢さんだね」
「そりゃそうよ」と、私は言った。
「お嬢さんとは心優しいものだわ」
そしてドラゴンは国道に沿って、ふらふらと街を後にした。私はドラゴンが小さくなるのを確認してから部屋に戻った。お昼寝の続き。
部屋の中はドラゴンのくさい息が漂っていたり雲が滴ったときの地揺れで部屋の内装ががたがたに崩れていたりと中々ひどい状態になっていたが、疲れのせいか私は瞬く間に眠りに落ちた。目を閉じた後も、開けっ放しのカーテンの向こうからオレンジ色に色を変え始めた太陽がいつまでも視界に残り続ける。よく見るとジャガイモみたいだ、と思い、そして、ほんとにあれはただのジャガイモかもしれない、と思ったのが、その日の私の最後の思考だった。ジャガイモ料理では、“じゃがバタ”が一番好きだ。

# 突風

唇を震わせると、彼ののどはぐるると鳴った。あたしの手の平は自分でも驚くほどに早く、彼の頬を撃った。指先が頬に触れ、一瞬感じた温もりを余計に苛立たしく思う。
熱く膨れ上がった細胞とびりびりと痺れあがった神経とが、何か無闇な力で以って、あたしを部屋の外へ押し退けた。夏にしては涼しい国道沿いの空気が身体の輪郭を際立たせる。積み重なった、なんとなしのいやな感じが身体中の穴から溢れそうになる。
ふと、夜を泳ぐ車の流れを眺めながら、数時間前に味わっていた彼の唾液の味を思い出した。いまだ口の中にこびりついているような気がして、あたしは道端につばを吐いた。何度も吐いた。
そして、あたしは歩く。股関節を大きく広げ、精一杯につま先を伸ばす。かかとをアスファルトに打ちつけ、飛び上がる。一瞬の、無重力。
まるでそれが、このクソくだらない現実に対抗する唯一の集団であるかのように、あたしは歩き続けた。その硬く等しいリズムが少しだけ、体に纏いつくなんとなしの嫌な感じを剥がし落とす気がする。気がする。
しばらく無心に歩き続けていると、自分がどこにいるのかよくわからなくなってきた。国道沿いをただ真っ直ぐに歩いていただけなのに、まるでどこか、違う世界に来てしまったようだ。そういえばこの辺りには初めて来た。向こうに見える工場のフェンスを乗り越えたら、たぶん本当に違う世界に行けるのだろう。どんな世界だ。
夜が深まり、少し気温が下がったようだった。脇に掻いた汗を冷たく思いながら羽織っていた彼の上着のポケットに手を突っ込むと、指先に何かを感じる。取り出すと、それは親指大のビー玉だった。やけに彩度の高い緑色をしたそれは、街灯と看板の光を受けて、きらりと幾つもの色を放つ。
こびりついた埃や毛屑が些か不快ではあったのだが、あたしは構わずそれを口に放り込んだ。つるりと、なにか、甘い味がした。甘味が脳髄に、そして全身の筋肉にゆっくりと染み渡ってゆくのがわかる。その甘味の軌道は、口を中心にして派生する根のようだ。生えてゆく。生い茂ってゆく。
張り巡らされた根はあたしの中で燻っていたなんとなしの嫌な感じを喰らい始めた。喰らい始めて、じきに喰らいつくす。そしてあたしの中は、根っこで一杯になる。ひしめき合う。
あたしは走り始めた。それは、あたしの中を満たす根っこに突き動かされたのだと思った。打ちつける打ちつける。飛び上がる飛び上がる。何もかもいちいちが、剥がれ落ちてゆく。皮膚の下で伸縮する筋肉があたしの手を離れ、はしゃぎ騒ぐ。
その一歩は空を突き破り、あの、雲に滲む月にまで飛び上がったはずだ。だが、あたしは足を絡ませて、そのままアスファルトに突んのめってしまった。両手だけでは支えきれずに、おでこをひどく擦りむく。急速に冷え込んだ身体が思い。冷たくも暖かいアスファルトが身体を優しく押さえつけている。
あたしは転んだ瞬間に吐き出したビー玉がころころと先のほうに進んでいくのを横目で見送りながら、頬と耳をアスファルトに押しつけた。逆らわない。

アスファルトはごうごうと、大きな脈で響いていた。目を閉じると、真っ赤な血脈が見える。手で触れると、引き込まれる。
あたしはその大きな震えにじっと、身を委ねた。そこが古くからの居場所であるように、あたしはそのまま深く沈んでいった。お風呂みたいだ。

# 無題

おっぱいが三つある女の話を聞いた。村木さんはその時、無心にポテトチップスの袋を漁っていた。もう、カスしか残ってないのに。うすしお味。
「でもさ、数がありゃいいってもんでもないよね」と、武井がひどく冷めた感想を述べた。
「肝心なのは硬さでしょ」
興奮気味に話していた磯貝にはその言葉や態度が癇に障ったようで、突然、顔を赤くして武井を罵倒しにかかった。
僕は磯貝のこういうところが大嫌いだったし、それはみんなも同じはずだ。飯塚だって。金子だって。そもそも磯貝がこの場にいる事に誰一人として納得していない。誰も呼んじゃいないのだ。でも、来た。来やがった。
磯貝の芸のない罵倒にうんざりしてきた僕は酒を買いに行くふりをして、部屋を出た。生ごみの袋からこぼれ落ちたのであろう、玄関に散った卵の殻を踏みしめながらドアを開けると、ひりひりとした寒気が服と身体の間に忍び込んでくる。体を微かに震わせる。肺に潜んでいた武井の部屋の気は、白く冬の青い夜空に広がってゆく。上のほうでは牛肉に散る脂身のように空に広がる千切れ雲が、月に照らされた溢れる青をせき止めている。
僕がそうやって廊下の柵にもたれながら空を眺めていると、何かがぬるっと右指の間に絡んできた。村木さんの右指だった。表面だけを撫でるような、少し怯えた手の繋ぎ方だった。とても冷たい、柔らかい指だ。
「さむいねぇ」と村木さんは言った。僕は指にこびりついた脂分が不快だったので、手を洗っておいで、と言った。村木さんは指を解き、右指をぺろりと舐めると部屋の中に戻っていった。ドアノブは左手で握っていた。
ばたん、とドアが閉まる。なんとなく全てが崩れてしまうような気がして、眩暈を覚える。
ばとん。
村木さんの残していったぬるつきを舐めとると、油っこい塩味が口の中に広がった。ぬるつきは拭いきることは出来ずに、指に残り続ける。
「ねぇ、コンビにでも行こうよ」
再び部屋の外に出て来た村木さんが言った。
「おさけもおかしも、もうないし」
言いながら、ついた水を飛ばすように、両手を振った。僕が右後ろのポケットからハンカチを差し出すと、ありがと、とだけ言ってとことこ歩いてゆく。
僕と村木さんは国道の脇を二人で歩いた。村木さんが前で、僕が後ろだった。村木さんはまるで月面にいるように軽やかに歩いた。ふわふわと。風に吹かれるコンビニ袋のようだった。車道は暗い夜の中を途切れ途切れに流れ続けている。光の粒がごうごうと流れる。
なんとなく、歩くリズムに合わせ、口笛に為りきらない口笛を吹く。夜の隙間からふっと立ち上がってきたその旋律の名前が、僕にはわからない。
でも僕は、それを、吹く。

気づくと村木さんは僕の隣に並んでいた。歩幅を合わせ、歩調を合わせ、そして口笛を合わす。たどたどしく、ちぐはぐに、旋律を、重ねあう。微かに、かすかに、笑みがこぼれる。体中の血管が、膨れ上がる。
その旋律が二周りした後、僕たちは近くのコンビニに辿り着いた。何一つ言葉を交わさずに、お茶とビールとにんにくしょうゆ味のポテトチップスを買った。お金はなんとなく出し合った。僕は七百円払った。
そして、僕は死んだ。
トラックが突っ込んできた理由もわからなかったし、その時、村木さんがどういう顔をしていたのかもわからなかった。この安穏とした日常に割って入ってきたクラクション音の元を見る暇もなく、僕はその巨大な鉄の塊に踏み潰された。たぶん、ぶら下げていたにんにくしょうゆ味のポテトチップスも粉々に砕けた。痛みを感じる事もなく、靴紐を結びにしゃがみ込んだ事を後悔する間もなく。全く、なんて味気ない死だろうか。
そして、僕は死んだ。でも生きている。というか、意識がある。村木さんが無事なのもわかる。僕が紐を結んでいる間に遠慮なく歩いていったみたいだ。というかというかというか。僕は死んだん死んだ死んだんだんだん。でも、意識がある。視覚も聴覚も触角もない。でも、意識がある。それはどの隙間より真っ暗で、その夜より静やかで、どの季節より寒い。
「ねぇ、しんだの？」と、村木さんが言ったような気がした。ぼんやりと村木さんを目の前に感じる。
「あぁ、死んだねぇ」と、僕は言ったような気になった。
「でも、意識があるんだ」
「霊魂だけはみだしたのね」と、村木さん。
「ゆうれいになったのよ」
僕は笑った。正確に言えば、僕の記憶にある“笑う”という動作をなぞったような行為をしようとした。目の前の空間が震えた気がした。村木さんも一緒に笑ったようだった。
「もう、手つなげないね」と、ひとしきり笑い終えた村木さんは言ったようだった。
「ざんねん」
「でも、意識があるんだ。一緒にいるだけならできるよ」
「そうはいかないわ。あなたは死んだし、私は生きてるもの」
「やだな」
「お別れね」と、村木さんは言った。
「ねぇ、好きだよ」と、僕は伝えた。
「そうね、最後だもんね。正直なるのはいいことだわ」と、村木さんは微笑んだ。
「私も好きよ」
そして僕は目の前に感じる村木さんの存在に一つ、穴が開いてゆくのを感じた。絶対の暗闇の中にあって、その穴が放つ光は唯一の拠り所のように思えた。暫くして、それは村木さんの口なのだとわかった。声を上げて泣いているようだった。
「あなたを食べてしまいたい」と、村木さんは呟いた。

「あなたに食べられてしまいたい」と、僕も言った。
僕は村木さんに感じるその穴に、身を捻じりこんでいった。なんとなくあたたかい感じがして、ぬるついたような感じもする。奥のほうまでいくと、武井の部屋で食べていた餃子のにおいも感じる。やさしくて、しあわせな感じがする。
ふと、世界中が細やかに震動したような気がした。村木さんが口笛を吹いていた。さっきの旋律。名前も知らない。
僕もまた、その旋律をなぞった。さっきよりうまく合わせられた。